

[解説]

新設看護学科における平成 18 年度第 1 回臨地実習指導者研修会開催報告 —地域連携・協働の臨地実習指導体制へ向けて—

丸山敬子、阿部明美、梨本光枝、下山博子、
阿部勝子、石山香織、本間千代子、渋谷優子

キーワード：看護学教育、臨地実習、臨地実習指導者

A report on the first workshop for nursing practice instructor in the new department of nursing (2006) ～ For the cooperation and collaboration on the field ～

Keiko Maruyama, PHN, MS, Akemi Abe, RN, MS, Mitsue Nashimoto, RN, PhD,
Hiroko Shimoyama, RN, MS, Katsuko Abe, RN, MS, Kaori Ishiyama, RN, MS,
Chiyoko Honma, RN, MS, Masako Shibuya, RN, PhD.

Keyword : nursing education , nursing practice , nursing practice instructor

1. はじめに

新潟医療福祉大学（以下本学とする）医療技術学部 看護学科（以下本学科とする）は、平成 18 年 4 月に、88 名の第 1 期生を迎えて 19 名の教員スタッフでスタートした。カリキュラムは看護師保健師統合カリキュラムであり、他に選択コースとして助産師、養護教諭のコースがある。

看護は実践科学といわれるように、看護学基礎教育において臨地実習は実践教育として中心におかれている。学生は講義と臨地実習の学びを統合し、看護に対する認識を深めることになる。つまり、看護学教育において、臨地実習は学生・教員の双方の活動を統合し目標を果たすことにとって重要である。

本学科においても、臨地実習の単位はカリキュラムの中で大きな割合を占めており、1 年次から 4 年次まで計画されている。さらに、実習施設も病院・施設・訪問看護ステーション・保健所・市町村と多岐にわたっている。これらの実習施設では、臨地実習指導者といわれるスタッフが教員とともに学生の指導にあたる。臨地実習現場では、学生にとって、毎日変化に富んだ学習のプロセスが展開されるが、

臨地実習指導者の学生への関わりは修学に多大な影響を与える。

そこで本学科では、地域連携・協働を図り臨地実習指導体制の構築を目指す第 1 回臨地実習指導者研修会（以下研修会とする）を計画し、平成 18 年度 7 月に実施したので、その概要と今後の展望・課題を報告する。

2. 研修会開催の背景

本学科は開設 1 年目であり、臨地実習指導者と教員の連携が急務の課題である。また、看護学生の実習受け入れが未経験の施設もあるため、臨地実習指導者に対して、学生の理解、臨地実習の概要や本学科の概要についての理解を深めてもらう必要があった。そこで、学科内の学外実習委員会のメンバーが中心となって企画し、研修会開催に至った。

3. 研修会開催の目的

開催の目的は、①本学科の看護学生の臨地実習受け入れや指導体制を整えるために教員と臨地実習指導者の連携・

丸山敬子 新潟医療福祉大学 医療技術学部 看護学科

[連絡先] 〒 950-3198 新潟市鳥見町 1398 番地
TEL/FAX : 025-257-4579
E-mail: maruyama@nuhw.ac.jp

協働を図り、研修を通して看護学教育の実習の意義、実習指導者の役割を認識する。②本学科の看護学教育への理解と実習指導方法の学習、情報交換、相互交流を通して看護学教育の質的向上を図ることである。今回は、その第1回開催とした。

4. 開催日時と内容

日時は、第1日目を平成18年7月7日(金)とし、3週間にわたり、第2日目を14日、第3日目を21日に設定して行った。

第1日目の内容は、開会挨拶に始まり、青年心理学と教育方法の講義をそれぞれ、本学健康スポーツ学科講師の山崎史恵先生(スポーツ心理学・スポーツカウンセリング領域)と後藤康志先生(教育工学・メディア教育領域)を招聘して行った。参加人数は、43名であった。

第2日目は、本学科のカリキュラムについて、教育の特色であるPBL(Problem-based Learning)について、また4年間の実習計画について説明をした。さらに各領域の担当教員が実習の概要を説明し、終了した。参加人数は、45名であった。

第3日目は、臨地実習指導者と教員間の交流を深めるため、昼食を伴にし、その後グループ演習を行い、実習指導場面実例の課題シートを3事例提示し、臨地実習指導者と教員を混合したグループに分け、ディスカッションと発表、質疑応答を行った。参加人数は43名であった。(表1) また、次年度以降の開催の参考資料とするために、今回の研修会について参加者にアンケート調査を行った。

表1 臨地実習指導者研修会内容

日時	内容	参加者数
H18 7月7日(金) 13:00～16:00	開会挨拶 講義「青年心理学」 講義「教育方法」	43名
H18 7月14日(金) 13:00～16:00	看護学科のカリキュラム 教育の特色(PBL) 4年間の実習計画 各領域の実習概要	45名
H18 7月21日(金) 12:00～13:00 13:00～16:00	昼食交流会 グループ演習 閉会挨拶	43名

5. グループ演習について

第3日目に行ったグループ演習の詳細は以下のとおりである。

1) 演習方法

(1) 参加者を6-7名で構成される7つのグループに分けた。各グループに2名の教員がファシリテーターとして参加した。

- (2) 演習課題シートは3事例用意した。
- (3) この演習課題シートを各グループに配布した。
- (4) 事例内容は、①患者の言動の解釈が表面的で、効果的な看護援助のための判断が困難な学生的事例、②机上の学習は十分だが、ベッドサイドでの実際の患者とのコミュニケーションが困難な学生的事例、③緊張感のため、実習前日に睡眠不足となり実習現場での集中力に欠ける学生的事例とした。
- (5) 実際の実習指導の場面では、臨地実習指導者が学生の言動の理由を推測し、どう理解するかということから指導が始まる。そこで、今回の事例においても学生を理解することからディスカッションが始められるように工夫した。そのため、各事例には、学生の言動を主に記載した。
- (6) この3事例に対し、臨地実習指導者としての考えやとらえ方、関わり方や具体的な指導方法について90分間のディスカッションを行った。
- (7) ディスカッションは、1グループ1事例とした。そのため、複数グループが同一事例に取り組むことになるが、発表までグループ間での交流はしない事とした。
- (8) ディスカッションの内容を各グループ代表者が発表し、質疑応答をした。

2) グループ演習の結果報告について

後日、グループ演習のまとめとして、参加した教員から、演習の経過、印象と気づいた点について報告してもらい、学外実習委員が分析した。

3) グループ演習の結果報告の分析について

演習の経過についての報告から、①ディスカッションで事例をどのように理解していったかについての「事例理解の状況」、②事例に対して、グループで考えた指導方法についての「事例への対処方法」、③その他、ディスカッションから導き出した「課題」が整理された。

- (1) 「事例理解の状況」としては、学生の言動についての解釈や学生の状況を擁護する意見がみられ、参加者が学生を理解しよう、受け入れようとする姿勢がみられた。一方、事例だけでは、学生の全体が見えにくいなど学生の状況理解の限界もみられた。
- (2) 「事例への対処方法」としては、「学生自身の気持ちや考えを確認する」、「指導者がモデル行動を示す」、「指導者が患者と学生間の仲介役となり、学生とともにケアを実施する」、「態度や知識面への指導をする」、「教員と連携をする」などが出された。
- (3) 「課題」としては、「学習の方向づけの難しさ」、「学生の私的な問題への対処の困難さ」、「多忙な臨床状況での学生指導の困難さ」、「大学の実習目的・目標理解状況の不十分さ」等があげられた。(表2)

(4) 演習活動の印象・気づいた点については、意味内容の類似性に従ってまとめた結果、以下の五つのカテゴリーにまとめられた。

- ①「グループワークの進行状況」では、演習開始時における参加者の「遠慮がちな様子」や「不安そうな様子」、徐々にグループディスカッションが「活発になっていった」や、「互いの意見を傾聴・尊重する」姿勢等が記述された。
- ②「臨地実習指導者の指導の着目点と傾向」では、「問題状況の分析はしているが学生の考えを確認するという視点の不足」、学生・患者間の仲介役としての役割は出されたが「学生自身へのアプローチの視点の不足」、「患者状況の分析が先行し学生の状況分析への視点が出にくかった」、「指導経験のある指導者からの学生に着目した意見」の表出、「学生の態度への批判ではなく学生を理解することが強調された」といった記述であった。
- ③「グループワークにおける教員のかかわり」では、

自己紹介や役割決定などを促すなどの「きっかけづくり」をしたほか、「教員が特に誘導することなく話し合いが進められた」との記述があり、一方、「ファシリテーターとして充分かかわれたのかどうか」、「参加者の疑問が中途半端に終了した」等の記述もあった。

- ④「臨地実習指導者研修会の意義・課題（教員サイドから）」では、学生指導経験があまりないことから「指導者の役割について意見を出すことに苦慮している」参加者の様子がうかがえたこと、患者中心の考え方から「いかに学生へも興味関心をもってもらえるか」といった課題とともに、「臨地実習指導について考えるよい機会となった」、「実習前に指導者とつながりがもてた」、「充実した実習が展開できるよう環境を整えていくきっかけづくりになった」等の記述があった。
- ⑤グループワーク全体を通しての感想等では、「全体発表はよくまとめられ効果的に行っていた」、参加

表2 グループ演習経過のまとめ

	事例理解の状況	事例への対処方法	課題
事例1	<ul style="list-style-type: none"> ・患者との関係がとれていない ・患者がなぜそう考えるのかが学生には聞けていない ・学生が話し方に困っているのか、これでいいと思っているのかわからない ・患者が倦怠感があり、やる気がないので、学生だけの問題ではない 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者が患者と接している場面を見せる ・学生の傾向とともに行動を考える ・学生にケアの必要性の理解度を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生に気づいてほしいが、どう気づかせるか、どう方向付けできるかが難しい
事例2	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの苦手な学生が多いのではないか ・学生の理解をするために、最近の学生の状態や抱えている不満についての理解が前提になる ・学生が患者とどのように関わればよいかかわからないのは当然である 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生と患者に指導者も入って3者関係でのコミュニケーションが有効なアドバイスになる ・教員や指導者が患者と学生間の仲介役になる ・指導者が学生に関心を寄せる ・学生に指導者の援助場面を見せる ・指導者が学生とともにケアを行い、コミュニケーションのきっかけを作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の实習目的・目標が明確にならないとどのように学生に関わっていいかわからない ・臨床現場は多忙で学生の指導に余裕がないが、学生を育てることが大切
事例3	<ul style="list-style-type: none"> ・指導場面というより学生個人の問題である ・学生の睡眠不足という状況の要因となる状況をいくつか話し合った ・学生の全体像がわかりにくい ・学生の生活の現状が予測しにくい ・態度がよくない学生という第一印象であるが、学生を肯定的に受け入れたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・睡眠不足や体調不良の原因を学生に直接確認する ・生活に問題のある学生には、教員と連携をとり対応する ・睡眠不足のまま実習をすることにより、予測される危険について指導する ・臨地実習現場では、理由のいかんを問わず、態度についての指導が必要 ・休養をとらせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の生活に関する指導は難しい ・臨地実習指導者は、学生の生活態度などについて、介入し、指導してもいいのか、判断が難しい ・学生数が多いと指導が困難である

者の実習指導への「意気込み」や「前向きな姿勢」が確認できた等であった。(表3)

6. アンケート調査について

アンケートは、第3回研修に参加していた臨地実習指導者全員43名に配布し、回収率は100%であった。質問内容は、開催の月・曜日・開催時間帯・一回ごとの研修時間の長さ・研修内容量と開催回数のバランスなど、開催スケジュールや時間割について適切であったかどうかを問うもの、各講義、説明、グループ演習がそれぞれ参考になったかどうか、研修会全体が実習指導の参考になったかどうかを問うものとし、「よくあてはまる」を4、「全くあてはまらない」を1として4段階で回答してもらうようにした。さらに、総合的な満足度を、「非常に満足である」を4、「非常に不満足である」を1として4段階で回答してもらい、その他に研修会のよかった点、今後の研修会への要望、感想を自由記載してもらった。

7. アンケート集計結果

アンケート集計の結果、開催スケジュールや時間割につ

いては、「開催の月・曜日・開催の時間帯・1日ごとの研修時間の長さ・研修内容量と開催回数のバランス」についての各問いに3あるいは4の回答が80%以上であった。

また、第1日目の「青年心理学と教育方法の講義」、第2日目の「本学科のカリキュラム・教育の特色(PBL)・4年間の実習計画の説明」についても同様に80%以上の回答者から、「各領域実習の概要についての説明」は約75%の回答者から参考になったという回答を得た。

第3日目のグループ演習については90%以上が参考になったと回答しており、また、研修会全体が指導の参考になったかどうかでも同様の回答が得られた。さらに、総合的な満足度は4と回答した者が10名(23.2%)、3が31名(72.1%)、2と1が0名と全員が肯定的な回答をした。(表4)

研修会のよかった点についての自由記載では、「グループワークで他施設の人と情報交換ができて参考になった」が16名、「本学の教育方針がわかった」が11名、「学生の学習方法がわかった」が8名、「教員と交流ができた」が6名などとなった。

今後の研修会への希望事項は、「臨地実習指導者に大学

表3 グループ演習活動の印象・気づいた点

グループワークの進行状況	<ul style="list-style-type: none"> ・開始当初は遠慮がちに発言していた ・司会などの役割決定後は、円滑に進んだ ・発言が滞ると司会者が積極的に発言を促していた ・たがいの意見を傾聴し、尊重する姿勢が見られた ・ディスカッションすることでコミュニケーションが活発になった ・グループワーク開始当初から実習指導に対して前向きな姿勢が印象的だった
臨地実習指導者の指導の着目点と傾向	<ul style="list-style-type: none"> ・問題の状況分析はしているが、学生に考えを確認するという視点が不足していた ・学生と患者の調整をする提案はあったが、学生に直接アプローチする視点がなかった ・患者の分析が先行し、学生の状況に対する分析が出にくかった ・学生の生活に関わる問題を考えるのは難しい様子だった ・経験のある指導者からは、学生に注目した意見が出ていた ・学生の態度を批判的に見ずに、理解することが強調された ・学生が看護師となったときまでを視野に入れた指導についても触れていた
グループワークにおける教員のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介や役割決定を促し、きっかけ作りをした ・教員が特に誘導することなく話し合いが進められた ・ファシリテーターとして十分関わられたかどうか反省する ・参加者の疑問が中途半端に終了した
臨地実習指導者研修会の意義・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・経験がない指導者は、指導者の役割について意見を出すことに苦慮していた ・患者分析だけに注目している指導者に、学生にも関心を持ってもらうようにするにはどう関わるかが課題である ・教員にとっても臨地実習について考えるよい機会であった ・実習開始前に指導者とつながりがもてたことの意義は大きい ・充実した環境を整えていくきっかけになった
グループワーク全体を通しての感想	<ul style="list-style-type: none"> ・発表はよくまとめられていて、効果的に行っていた ・さまざまな意見が活発に出て、指導への意気込みを感じた ・開始当初から、実習指導に対して前向きな姿勢が印象的だった ・指導経験の違いが意見に反映されていた

が求めるものを知りたい」が7名「今後も継続してほしい」が5名、「事例をもっと知りたい」「現代の学生の実情と対応方法を知りたい」が4名などとなった。

感想では、「研修で学んだことを参考にして指導していきたい」が6名、「大変勉強になった」が5名、「学生へのかかわりを積極的にしていきたい」が3名などとなった。(表5)

8. グループ演習結果報告の分析とアンケート結果からの考察

今年度は企画した教員も指導者も初回の実施であったが、スケジュールや時間割については大多数の参加者が適切と答えていること、総合的満足度の高さからも、参加者にとって満足のいくものだったと考える。

実習指導の参考になったかどうかについては、各実施内容とも参考になったと答えている者が多数である。中でも、本学科の教育の特色であるPBLの説明とグループ演習は高い評価となっている。これは、PBLが実習現場で学生の力を十分に引き出すことができる教育方法であることが理解された結果と考える。

グループ演習においては、実習指導経験の有無に関わらず、アンケートからもグループ演習結果報告からも、実習指導に対して前向きで積極的な姿勢、学生理解への意欲がみられた。さらに、また、教員も交えてディスカッションしたことで、情報交換と相互交流が行われ、連携や協働についての認識を深められた。

一方、グループ演習結果報告では、学生の気持ちや考えに寄り添い分析し、アプローチ方法を考えて、配慮する視

点の不足もうかがえた。臨地実習指導経験の不足から、学生が表出する言動をどう受け止め、対処したらいいか見いだせない状況も明らかになった。臨地実習指導経験の少ない指導者へ向けたプログラムの導入の必要性も含めて、来年度以降の研修内容の検討の課題としたい。また、臨床現場の莫大な業務量と煩雑さと学生数のバランスの調整や、本学科の実習概要の具体化が課題としてあがった。

今回の研修会は、教員と臨地実習指導者の連携・協働の萌芽としてよい機会となったが、実習指導者の役割については今後更に検討を重ね、臨地実習指導体制の構築を目指すことが期待される。

また、本学科の看護学教育への理解と実習指導方法の学習については、実習内容や実習計画が具体化されることで、今後さらに充実していくものと考えられる。

9. 終わりに

臨地実習における臨地実習指導者の学生への関わりは修学に多大な影響を与えるだけに、指導者の質的向上を図ることが本学科の課題であり、任務である。来年度の第2回臨地実習指導者研修会開催に向けて、今年度の結果を踏まえて、スケジュールや内容を検討し、企画をしていく必要がある。

10. 参考文献

- 1) 杉森みどり：看護教育学 第4版, 医学書院, 2004.
- 2) 藤岡完治 屋宜譜美子：看護教育講座6 看護教員と臨地実習指導者, 医学書院, 2004.

表4 臨地実習指導者研修会アンケート 集計結果(1)

	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)
	よくあてはまる		全くあてはまらない	
開催の月は適切である	13 (30.2)	23 (53.5)	6 (13.9)	1 (2.4)
開催の曜日は適切である	13 (30.2)	21 (50.4)	6 (13.9)	2 (5.5)
開催の時間帯は適切である	11 (25.6)	26 (60.5)	5 (11.5)	1 (2.4)
1日の時間は適切である	19 (44.2)	21 (48.9)	3 (6.9)	0 (0)
内容量と回数は適切である	11 (25.6)	22 (51.1)	9 (20.9)	0 (0)
「青年心理学」は参考になった	16 (37.2)	19 (44.2)	7 (16.2)	0 (0)
「教育方法」は参考になった	22 (51.1)	18 (41.9)	2 (5.5)	1 (2.4)
「カリキュラム」は参考になった	14 (32.6)	24 (55.8)	4 (9.9)	0 (0)
「教育の特色」は参考になった	28 (65.1)	14 (32.6)	1 (2.4)	0 (0)
「実習計画」は参考になった	15 (34.9)	22 (51.1)	5 (11.5)	0 (0)
「各領域の概要」は参考になった	7 (16.2)	24 (55.8)	11 (25.6)	0 (0)
「グループ演習」は参考になった	32 (74.4)	10 (23.2)	1 (2.4)	0 (0)
研修会が指導の参考になった	26 (60.5)	15 (34.9)	1 (2.4)	0 (0)
	4 (%)	3 (%)	2 (%)	1 (%)
	非常に満足		非常に不満足	
総合的満足度	10 (23.2)	31 (72.1)	0 (0)	0 (0)

表 5 臨地実習指導者研修会アンケート 集計結果 (2)

よかった点	人数
グループワークで、他施設の人たちと情報交換ができて参考になった	16
本学の教育方針がわかった	11
学生の学習方法がわかった	8
教員と交流ができた	6
学生の特徴がわかった	4
学長や教員の思いがわかった	3
いい意味でプレッシャーを受けた	2
その他、リフレッシュできたなど 2 項目	各 1
今後の研修会への希望事項	
臨地実習指導者に大学が求めるものを知りたい	7
今後も継続してほしい	5
事例をもっと知りたい	4
現代の学生の実情と対応方法を知りたい	4
各実習領域の説明を具体的に聞きたい	3
教員が普段どのように学生に指導し、学生はどんな反応をしているのかを知りたい	2
PBL をもっと詳しく知りたい、実際にやっているところを見たい	2
その他、現場の悩みを聞いてほしいなど、4 項目	各 1
感想	
研修で学んだことを参考にして指導していきたい	6
大変勉強になった	5
学生へのかかわりを積極的にしていきたい	3
その他、指導で迷ったときは、アシストしてほしいなど 2 項目	2